

榮光

740号

2022年1・2月
日本基督教団
田園調布教会
伝道部発行

〒145-0071
東京都大田区田園調布
3-34-18
電話 03-3721-2811
FAX 03-3721-2814
<https://den-church.jp/>

新年礼拝説教

新生

イザヤ書 六五章一七〜二五節
ヨハネの黙示録 二二章一〜五節

牧師 高橋和人

時の種類

新しい年を迎えることができませんでした。しかし、昨年が続いて世界はコロナ禍に見舞われています。これほど長く続くとは予想できませんでした。そのために実に多くのことが新しくなることができません。

時には二種類あると言えます。一つは、過ぎ去っていく、古くなっていく時です。新しい時も、すぐに過ぎ去り、みな過去のものとなってしまうような時です。川の流れのように流れていく時です。

もう一つは、いつまでたつても輝きを失わず、むしろその輝きが、次第に研ぎ澄まされていく時です。年齢を重ねてきますと、自分の歩みを決める大きな時があったことに気づきます。その時は、それほどのこととは思われなくても、後になって、その出来事の大切さが分かってくるような時です。

例えば生涯を決める誰かと出会った時。小さな出会いであったものが大きな転換をもたらすことになりま

すことになりま。そういう時は、次第に磨かれていきます。そのように古びて錆びていく時と、磨かれていく時があるということができます。

磨かれて行く時は、その時は小さな出来事であり、小さな決断であり、小さな言葉との何気ない出会いのことがあります。それが生涯を決定付け、支えるものとなることがあります。

時の空しさと希望

しかし、時ほど思い通りにならないこともないのです。過ぎ去って欲しいことは過ぎ去ることなく、続いて欲しいことは一瞬です。また、晴れやかで誇らしいと思えたことが、振り返れば人生の足かせになっていったということだつてあります。

旧約のコヘレトの言葉には「コヘレトは言う。なんとという空しさ、なんとという空しさ、すべては空しい。太陽の下、人は労苦するが、すべての労苦も何にならう。一代過ぎればまた一代が起り、永遠に耐えるのは大地。日

は昇り、日は沈み、あえぎ戻り、また昇る。風は南に向かい北へ巡り、めぐり巡つて吹き、風はただ巡りつつ、吹き続ける。川はみな海に注ぐが海は満ちることなく、どの川も、繰り返してその道程を流れる。」(一・二七)と過ぎ去る時のむなしさを語りま

す。さらにそれに続けて「何もかも、もの憂い。語り尽くすこともできず、目は見飽きることもなく、耳は聞いても満たされぬ。かつてあったことは、これからも起る。かつて起ったことは、これからも起る。太陽の下、新しいものは何ひとつない。見よ、これこそ新しい、と言つてみても、それもまた、永遠の昔からあり、この時代の前にもあった。」(一・八〇)と言います。

そのようにコヘレトは流れていく時の空しさをはつきりと暴いています。特に聖書の世界であるユダヤ・パレスチナは古代から大国の興亡の舞台でありました。次々と国が興つては滅亡していった地域です。支配者が変わるたびに大きな犠牲を払わなければならなかった地域です。大国でさえ流されていく時の流れを知っているのです。

しかし、聖書はこの空しさに絶望するわけではありません。コヘレトは「青春の日々にこそ、お前の創造主に心を留めよ。苦しみの日々が来ないうちに。『年を重ねることに喜びはない』と言う年齢にならないうちに。」(二一・二)と若者への希望を教えます。若いうちに創造主である神を知ることが、空しさに飲み込まれない生き方になるということをお教えるのです。青春の日々、というのは心が柔軟で感受性も豊かな時のことでしょう。しかしそれだけでなく、人生をあきらめる前にといいことです。

創造主なる神と

聖書はこういうことを教えることのできる